

本短篇文学全集 47

岡昇平

馬頼義

島信夫

高健



責任編集 臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第47巻

昭和44年3月15日第一刷発行

著者 大岡昇平
有馬頼義
小島信夫
開高健
発行者 竹之内静雄

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
郵便番号 101-91
電話 東京(291)7651
振替 東京4123
製版・明和印刷
印刷・多田印刷
製本・鈴木製本
定価 360円

目次

大岡昇平

捉まるまで 三

歩哨の眼について 四

女中の子 五

有馬頼義

軍犬一等兵 七

第三の現場 一〇

小島信夫

小銃

..... 一四

微笑

..... 一六

十字街頭

..... 一七

開高健

流亡記

..... 三二

鑑賞(江藤淳)

..... 三七

裝幀 枡折久美子

大岡昇平

大岡昇平（ひろしげ）

明治四十二年三月東京牛込に生れた。青山学院中等部に学び成城高校文科に進んだ。富永太郎・小林秀雄・中原中也・河上徹太郎と交遊。昭和四年京大仏文科に入学、同人雑誌「白痴群」を創刊した。七年京大を卒業。「作品」「文学界」などに批評を書き、スタンダールなどの翻訳をした。昭和十三年から十八年まで帝國酸素・川崎重工業に勤めた。十九年召集を受けフィリピンに送られる。二十年十二月復員。二十一年「俘虜記」を書き、二十三年「文学界」に発表、横光利一賞を受けた。二十五年「武蔵野夫人」、二十六年「野火」を発表、「野火」により読売文学賞を受賞。二十八年アメリカに留学しフランス・イギリスなどをまわり二十九年末帰国した。三十七年訪ソの旅。確かな批評の目と古典的な文体を持つ現代の代表的な作家である。主な作品は前記のほかに長篇「ハムレット日記」「雛花」、短篇集「サンホセの聖母」「妻」「母」「逆杉」、旅行記「ザルツブルクの小枝」、評論集「詩と小説の間」「朝の歌」「在りし日の歌」「現代小説作法」など。

捉まるまで

わがころのよくてころさぬにはあらず 歎異抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜ふりよとなった。

ミンドロ島はルソン島西南に位置し、わが四国の半分ほどの島である。軍事施設としてみるべきもなく、これを守るわが兵力は歩兵二箇中隊、海岸の六つの要地に、名ばかりの警備駐屯を行うのみである。

私の属する中隊は昭和十九年八月以来、島の南部及西部の警備を担当した。中隊本部は私を含む一箇小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊は、それぞれ東南ブララカオ西北パルアンにあ

った。サンホセ、パルアン間、つまり島の全長を蔽おほう約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けていた。しかし彼等は攻撃しては来なかった。

昭和十九年十二月十五日、米軍は艦船約六十隻をもつてサンホセに上陸した。我々はただちに山に入り、南部丘陵地帯を横切つて、三日の後ブララカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍は、ブララカオには上らなかったが、小隊はサンホセの砲声を聞き、糧食、無線機と共にあらかじめ退避をしていたのである。糧食は豊富にあり、まもなく我々と合流した附近水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戦闘員を合せ総員約二百名、なお三カ月以上を支え得るはずであった。明けて一月二十四日米軍の襲撃を受けて四散するまで、約四十日我々はここに露営した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍はただちに追求

しては来なかった。「奴等は怠け者だからこんなところまでやって来やしないさ。そっちが来なけりやこつちだつて行かないや。そのうち戦争も終るだらう」と我々の当分の宿舎となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいったが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。すなわち米軍がこの島をルソン島攻撃の中継基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にじつとして居れば、戦は我々の上を通過して、こゝは最後までいゝわゆる「忘れられた戦線」として残る可能性があつたからである。我々のような孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかった。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵状偵察の命を受け、たびたび十数名より成る斥候が組織され、十日或いは一週間、サンホセ附近の山中に潜伏して帰つた。或る時

彼等は米哨兵に発見され射撃された。

まもなく一箇小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見た状況を大隊本部に打電した。彼等はしばしば数十隻より成る船団がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆撃機が多数新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操つて魚を釣つた湾内には、米内火艇が引掻いたような白い水脈を引いて疾駆していった。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて来た。しかし彼等の到着予定日には米軍が中部東海岸一帯に上陸しており、彼等に乗せた舟艇は以来行方不明であつた。もつともこの斬込隊は我々の間ではあまり歓迎すべき客とは考えられていなかった。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもつて

上陸した米軍に対する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持っていなかった。

しかし我々はその後も命令により幾度かブララカオに出張し、或いは到着しているかも知れぬ斬込隊を迎えに行つた。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに來た不運な住民を拉致して歸つた。こうして我々は不本意ながらだんだん掃蕩される原因を作つたのである。

こうした絶望的状况にあつても、我々兵士は比較的暢氣であつた。我々はことごとくその年初めて召集され、三カ月の教育の後こゝへ送られた補充兵であり、経験の欠如から事態の重大さがぴんと来なかつたからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといって、いつ来るかわからぬ圧倒的に優勢な相手を、毎日氣に病んでいられるものでもない以上、こうした無智は我々にとってむしろ一種天与の恩恵だったということも出来ようか。我々は大部分

私のような三十を超した中年の兵士であり、目前の事態から強いて早急な結論を求めようとはしなかった。

それに山中の生活は最初のうちはそんなに悪いものではなかった。氣候はすでに乾季に入つて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみのまゝの露營生活には手頃な陽氣である。

糧食も差当つて不自由なく、分隊ごとに疎開分宿したから軍紀もおのずから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンブにでも来たような氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の土民（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黒い山地人で、戦争に無関心である）と馴れて、赤布、アルミ貨等を与えて芋、バナナ、煙草等を獲た。我々はまた時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやつて來た。マラリア

である。

ミンドロは比島群島中最も悪性のマラリアの発生する島だそうである。しかし予防薬をとっていたため、サンホセに在る間は患者は二三名を超えなかったが、山へ入る時衛生兵がキニーネを忘棄したので、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲撃された時、立つて戦い得る者三十人を出なかった。最後の半月の間には大体一日三人ずつ死んで行った。

病人は静かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その暢気な日常と異様な対照を示していた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞った。彼は小屋に充滿している病人を眺め、黙って戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いていた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした、彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごし

ているから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局こうして病人が増えて動きがとれなくなったのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判断にはルソン島を永久の安全地帯と見做す近視眼的前提が含まれていた。かつてノモンハンの戦闘を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかゝる樂觀的予測を抱懷し得たはずはない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顔には現れていた。私は彼の体にその僚友の死臭を嗅ぐようにさえ思つた。

「警備隊は警備地区をもつて墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつていたが、私は彼が通り一遍の訓示を行つていたとは思わない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿^{ひそく}しようとはしなかった。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与え放ち帰らしめた。彼の言動には一種の諦め^{あきら}めがあり、動作はいわば過度に緩慢^{かんまん}であって、時々齒の間から押し出すように弱く笑った。犠牲者の笑いである。

彼は幾分進んで死を求めたようである。サンホセ駐屯中行った討伐戦において、彼は常に先頭に立って戦い、決して自分を遮蔽^{しやへい}しなかった。彼は自分では戦争の要請を至上命令として自分に課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感じずにはいられない、あの心の優しい指揮者の一人であった。彼等は一般にただ自己の死によってしか、その部下に対する要求を正当化する手段を持っていない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火点観測のため単身前進し、迫撃砲の直撃弾を受けて最先

に戦死した。恐らく本望だったろう。

一種の共感から私はこの若い将校を秘かに愛していた。私もまた私なりに、彼とはかなり違った意味においてであつたけれど、自分の確実な死を見詰めて生きていたからである。

私はすでに日本の勝利を信じていなかった。私は祖国をこんな絶望的な戦に引きずりこんだ軍部を憎んでいたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかった以上、彼等によって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた。一介の無力な市民と、一国の暴力を行使する組織とを対等に置くこうした考え方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に駆り出されて行く自己の愚劣を嗤^{わら}わないためにも、そう考える必要があつたのである。

しかし夜、関門海峡に投錨^{とうぼう}した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具のような連絡船の赤や青の灯を見ながら、奴隸^{どれい}のように死に向って積み出され

て行く自分の惨めさが肚にこたえた。

出征する日まで私は「祖国と運命を共にするまで」という觀念に安住し、時局便乗の虚言者も、空しく談ずる敗戦主義者も一繋げに嗤っていたが、いざ輸送船に乗ってしまうと、單なる「死」がどっかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は満足すべきものではなく、別れを告げる人であり、別れは實際辛かったが、それは現に私が輸送船上にいるという事實によって、確實に過ぎ去った。未来には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全な虚無であり、そこに移るのも、今私が否応なく輸送船に乗せられたと同じ推移をもつてすることが出来るならば、私に何の思い患うことがあるう。私は繰り返してこう自分にいい聞かせた。しかし死の觀念は絶えず戻って、生活のあらゆる瞬間に私を襲った。私は遂にいかにも死とは何者でもない、ただ確實な死

を控えて今私が生きている、それが問題なのだということを了解した。

死の觀念はしかし快い觀念である。比島の原色の朝焼夕焼、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を眼で食った。私は死の前にこうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入ってからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性な秩序が取って替ったが、それも私にはますます美しく思われた。こうして自然の懷で絶えず増大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確實なしるしであると思われた。

しかしいよいよ退路が遮断され、周囲で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な変化が私の中で起った。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確實な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する気になった。

少なくともそのために万全をつくさないのは無意味と思われた。

明らかにこれは周囲に濃くなって来た死の影に対する私の肉体の反作用であつた。こうした異常な状態にあつて、肉体が我々をして行わしめるものはすこぶる現実的であるが、その考えさすものは常に荒唐無稽である。

私には一人の仲間があつた。滋野は或る漁業会社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイズムに愛想をつかし（と彼はいつていた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戦うことを夢みた。彼は内地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、みずから内地に残る手段を絶ち切つていた。彼の夢は前線の状況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戦っていると判断し、「こんな戦場で死んじやつまらない」と思った。

この言葉は私にとって一種の天啓であつた。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思い当つた。こんな辺鄙な山中でなすところなく愚劣な作戦の犠牲になつて死ぬのは、「つまらない」、ただそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計画を立てた。その計画とはこうである——いずれ我々が米軍によつて現在地を逐われるのは確実として、何とか敵中を潜つて西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利用して島伝いにボルネオに遁れる（この際私が海水浴場で覚えた帆走術が役立つはずであつた）。私はボルネオも安全とはいえないから、いつそ南支那海を突切つて仏印に渡つてはどうかと提案したが、滋野はそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといった。

帆船が得られなかった場合、我々は再び山に籠り、

草の根でも食べて休戦を待つのである。我々は昔読んだ「ロビンソン・クルーソー」の細目を語り合い、土民に木から火を起す方法を学んでおいた。

この計画はいかにも空想的であるが、我々はその実現の可能性を少しも疑わなかった。

我々は繰り返し計画を検討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足のように快活であった（我々は実際墓穴を掘った）。我々の最も身近な敵、マラリアに罹（かか）った場合を考慮し、現在残った唯一の対抗法、つまりあらかじめ体力を貯えることに全力をあげた。我々は病人の残した粥（かゆ）を食べ、土に落ちた飯粒も拾って食べた。

我々はどうしてあらゆる場合に備（そな）えて周到に計画していたにもかかわらず、ただ我々がマラリアで発熱している丁度その時、米軍がやって来る可能性に想到しなかった。

二人共申し合わせたように一月十六日に発熱した。

私は毎日四十度の熱が続き、二日目に足が立たなくなり、三日目に舌がもつれた。滋野の症状は私ほど重くはなかったが、熱は毎日三十九度以上出た。

最初の試煉が来たのである。私は心に「武器を取れ」を叫んだ。私の体は強健ではなかったが、病に對して比較的抵抗力があるのを知っていた。私は細心に自分の症状を観察し、療法を自分で工夫した。熱のためすぐ下痢が始まったのを見て、消化器に無益な負担をかけないために（これがその時の私の考えであった）一切食べないことにした。半月位食べずにいても、体力を維持するだけのエネルギーを貯えてあると、私は自負していたのである。

衛生兵は山へ入ってから奇妙なマラリア療法を説明していた。つまりマラリア患者は水を吞んではいけないというのである。私はそれまでの盲従の習慣を一擲（いってき）し、断乎として反対した。あらゆる論拠をあげて、禁止の無意味なることを証明した。分隊長は

怒って兵士が私のために水を汲むことを禁じた。私は他の分隊の兵士が通るのを待ってひそかに頼み、或いは自分で十間ばかり離れた泉まで匍はって行って水筒に汲んだ。

私は死がマラリア患者を急激に襲うのに気がついていて、私は絶えず自分の体の状態を監視し、まだ死についないのを確かめた。私はまた病人が死ぬ前に糞便を失禁するのを知って、苦痛が激しくなるとわざと戸口まで匍はい出して小便を試みた。

この間に一人同じ分隊の兵士が死んだ。屍体は私の胸を越えて運ばれた。分隊の全員が病人であったから、比較的軽い病人が土葬を手伝わねばならなかった。長らく発熱していて少しよくなったと思われる一人の兵士が、死人の装具を一町ばかり上の中隊本部まで返納にやらされた。帰って小屋に入る時、私は彼の顔が異様に歪ゆがんでいるのを認めた。翌朝彼は死んでいた。

この兵士が死んだのは一月二十二日である。私も少し熱が下り、夕方発病後初めて少量の粥かゆを摂とった。その時展望哨が米船三隻がプラカオ湾内に入るのを見たと言えた。

分隊長は中隊本部へ行き、なかなか帰らなかった。帰っても不機嫌に横になったきり何もいかなかった。我々は通りすがりの兵士から、ただちに四名の斥候が出たということを知った。

翌朝眼がさめて小屋の周囲が何事もなく明るくなっているのを、不思議な気持ちで眺めたのを憶おもえている。私は漠然とその払曉よつあけ米軍が来るかなと考えていたのである。その日も一日無事に暮れた。前夜出た斥候は帰らなかった。夜私は分隊長に「今日米軍が来なかったところを見ると、僕達は包囲されてるんじゃないでしょうか」といった。彼は「病人の癖に生意気いふな」といった。

次の日は一月二十四日である。払曉また一組の将

校斥候が出た。七時頃一人の兵士が帰って、一行は麓で米兵に襲撃され、将校は戦死したと伝えた。

分隊長はまた中隊本部に呼ばれ、すぐ帰って、病人は非戦闘員と共にサンホセ方面高地の分哨小隊まで退避する、歩ける者は仕度しろといった。そして彼自身も仕度をはじめた（彼も少し前から病人と称していた）。

私もようやく歩いて便所へ行けるまで恢復していたが、分哨まで十五料の道は自信がなかった。その先またどれだけ歩かなければならないか知れたものではない。私は遂に自分がこゝで死ななければならぬことを納得した。

分隊長以下十二名中二名が死んで十名である。そのうち私を入れて四名が残った。滋野は行くつもりらしく仕度を始めた。私も外へ出て、何となく小屋の周りを歩きながら、彼に改めて「俺は残るよ」といった。

彼も大分よくなっていた。彼は私の腋の下へ腕を入れ「大丈夫だ。俺が助けてやるから一緒に行くこゝろ」といった。私はふと歩けるところまで彼と一緒に行く気になった。私は分隊長に決心を変えたことを伝えた。彼は黙っていた。

各自押し黙って仕度をした。別れの言葉は交されなかった。

出発の時になった。私が皆に随いて歩き出そうとすると、分隊長が振り向いて、しかし私の顔を見ないようにながら「大岡、残るか」といった。私は咄嗟に私がいかに一行の足手纏いになるべきか、私の状態が職業軍人の眼にどう映るかを了解した。私は「残ります」と答え、銃を下した。

滋野は何故かこの時先発して私の見えないところまで上っていた。その時の状況では彼を呼び返す気は起らなかった。こうして私はこの比島脱出の相棒と、さよならもいわずに別れてしまったのである。